福岡市埋蔵文化財調査報告書第1335集

都地遺跡6

―第9次調査報告―

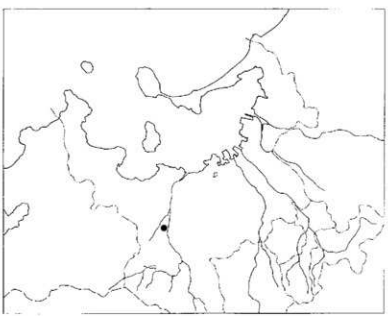
2018

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1335 集

都地遺跡 6

— 第 9 次調査報告 —



2018

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

福岡市が位置する博多湾沿岸地域は玄界灘を介したアジア各地との交流の玄関口として発展してきました。地中に埋もれた数々の文化財は、人々が歴史・文化を積み重ね、現在の地域・社会を形作る礎となったことを示す貴重な財産です。福岡市教育委員会では開発などでやむを得ず遺跡が破壊される折には発掘調査を実施し、記録として残していけるよう努めております。

本書は、金武小学校留守家庭こども会施設増築工事に伴う都地遺跡第９次調査の報告です。近世から近代の墓地や、弥生時代の柱の跡などを発見し、古くから人々がこの地で生活をしていたことが確認できました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました福岡市こども未来局放課後こども育成課、金武小学校をはじめとした関係者の方々に心から感謝申し上げます。

平成 30 年 3 月 26 日

福岡市教育委員会
教育長　星子　明夫

例言

1．本書は西区大字金武所在金武小学校の留守家庭こども会施設増築工事に伴い、平成 28（2016）年 3 月 14 日から同年 5 月 13 日に発掘調査した都地遺跡第 9 次調査の報告書である。
2．遺構の実測・写真撮影は朝岡俊也が行った。
3．出土した墓石の拓本は吉野一憲が行った。
4．遺物の実測は朝岡・山本麻里子・山本晃平が行った。
5．遺物の写真撮影は朝岡が行った。
6．製図は朝岡が行った。
7．本書に掲載した方位はすべて磁北である。
8．本書に掲載した座標は世界測地系を用いた。
9．本書に掲載した標高は都市再生街区基準点 1A179（H=21.483m）を基準とした。
10. 本書に使用した遺構略号は以下の通り。
ＳＡ　柵列　　ＳＢ　掘立柱建物　　ＳＣ　竪穴建物　　ＳＫ　土坑・土坑墓　　ＳＰ　柱穴
ＳＲ　早桶墓　　ＳＴ　甕棺墓　　ＳＸ　その他
11. 本書に関わる図面・写真・遺物は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。ただし、出土した甕棺の多くは、口縁部から肩部の一部を打ち欠いて持ち帰り、その他は法量計測・写真撮影後に埋め戻した。また、出土した人骨は写真撮影後、こども未来局放課後こども育成課を窓口として、西区生活環境課に引き取っていただいた。
12. 本書における人骨の性別・年齢の推定は以下の文献を基に朝岡が行った。性別は寛骨を、年齢は歯の摩耗具合を判断の根拠としたが、朝岡は人骨の専門家ではないため、多少の誤りを含む可能性は否めない。なお、調査に際し、事前に埋蔵文化財センター（当時）の上角智希氏にご指導を賜った。
谷畑美帆・鈴木隆雄 2004『考古学のための古人骨調査マニュアル』学生社
坂田邦洋 1996『比較人類学』青山社
13. 本書の執筆・編集は朝岡が行った。

遺跡名	都地遺跡	調査次数	9 次	調査略号	TZI－9
調査番号	1547	分布地図図幅名	都地 93	遺跡登録番号	020420
事前審査番号	27－1－94	調査対象面積	205 ㎡	調査面積	205 ㎡
調査地	福岡市西区大字金武 2028 番地 1				
調査期間	平成 28（2016）年 3 月 14 日～同年 5 月 13 日				

本文目次

序

Ⅰ．はじめに

1、調査に至る経緯 …… 1

2　調査の組織 …… 1

Ⅱ．遺跡の立地と環境

1、地理的環境 …… 2

2、歴史的環境 …… 2

Ⅲ．調査の記録

1、調査の概要 …… 4

2、甕棺墓 …… 6

3、早桶墓 …… 23

4、木棺墓 …… 26

5、不明土坑 …… 27

6、その他の遺構 …… 29

7、建物・棚列の可能性のある柱穴列　29

8、その他の遺物 …… 30

9、墓石 …… 30

Ⅳ．考察

1、墓地の変遷 …… 35

2、調査のまとめ …… 36

挿図目次

Fig.1　都地遺跡の位置（1/25000）…… 2

Fig.2　都地遺跡調査区位置図（1/5000）…… 3

Fig.3　第９次調査区位置図（1/2000）…… 4

Fig.4　第９次調査区全体図（1/80）…… 5

Fig.5　甕棺墓①(1/20) …… 7

Fig.6　甕棺墓②(1/20) …… 8

Fig.7　甕棺墓出土遺物①(1/2・1/3・1/8)…… 9

Fig.8　甕棺墓③(1/20) …… 10

Fig.9　甕棺墓出土遺物②(1/2・1/3・1/8)… 11

Fig.10 甕棺墓④(1/20) …… 12

Fig.11 甕棺墓出土遺物③(1/2・1/3) …… 13

Fig.12 甕棺墓⑤(1/20) …… 14

Fig.13 甕棺墓⑥(1/20) …… 16

Fig.14 甕棺墓出土遺物④(1/2・1/3) …… 17

Fig.15 甕棺墓⑦(1/20) …… 18

Fig.16 甕棺墓出土遺物⑤(1/3) …… 19

Fig.17 早桶墓①(1/20) …… 21

Fig.18 早桶墓②(1/20) …… 22

Fig.19 早桶墓・木棺墓出土遺物（1/2・1/3）23

Fig.20 木棺墓（1/20）…… 24

Fig.21 不明土坑①(1/20) …… 25

Fig.22 不明土坑②(1/20) …… 26

Fig.23 不明土坑・その他の遺構・柱穴出土遺物
（1/2・1/3）…… 27

Fig.25 建物・棚列の可能性のある柱穴列①
（1/40・1/60）…… 28

Fig.26 建物・棚列の可能性のある柱穴列②
（1/60）…… 29

Fig.27 その他の遺物（1/2・1/3）…… 30

Fig.28 墓石①（1/8）…… 31

Fig.29 墓石②（1/8）…… 32

Fig.30 墓石③（1/8）…… 33

Fig.31 墓石④（1/8）…… 34

Fig.32 墓地変遷図 …… 37

表目次

Tab.1　都地遺跡発掘調査一覧 …… 3

Tab.2　甕棺墓一覧 …… 6

Tab.3　甕棺墓属性一覧 …… 38

図版目次

PL. 1 (1)Ⅰ区全景①(北東より)
(2)Ⅰ区全景②(南より)

PL. 2 (1)Ⅱ区全景①(北東より)
(2)Ⅱ区全景②(南西より)

PL. 3 (1)ＳＴ０１
(2)ＳＴ０３
(3)ＳＴ０５
(4)ＳＴ０６
(5)ＳＴ０９
(6)ＳＴ１０
(7)ＳＴ１１蓋
(8)ＳＴ１１

PL. 4 (1)ＳＴ１２
(2)ＳＴ１３
(3)ＳＴ１６蓋
(4)ＳＴ１６
(5)ＳＴ１７
(6)ＳＴ１８
(7)ＳＴ２２
(8)ＳＴ２３

PL. 5 (1)ＳＴ２６
(2)ＳＴ２９
(3)ＳＴ３１
(4)ＳＴ３２
(5)ＳＴ３６
(6)ＳＴ３７
(7)ＳＴ４１蓋
(8)ＳＴ４１

PL. 6 (1)ＳＴ４１拡大
(2)ＳＴ４５
(3)ＳＴ６０
(4)ＳＴ６２
(5)ＳＴ６３
(6)ＳＴ６９
(7)ＳＲ１５
(8)ＳＲ２１

PL. 7 (1)ＳＲ３４
(2)ＳＲ３８
(3)ＳＲ６６
(4)ＳＸ２７
(5)ＳＴ１１頭骨①
(6)ＳＴ１１頭骨②
(7)ＳＴ１１頭骨③
(8)ＳＴ１１頭骨④

PL. 8 (1)ＳＴ０１
(2)ＳＴ０３
(3)ＳＴ０６
(4)ＳＴ０９
(5)ＳＴ１０
(6)ＳＴ１１
(7)ＳＴ１２
(8)ＳＴ１３

PL. 9 (1)ＳＴ１６
(2)ＳＴ１７
(3)ＳＴ１８
(4)ＳＴ２３
(5)ＳＴ２６
(6)ＳＴ２８
(7)ＳＴ３２
(8)ＳＴ３６

PL. 10 (1)ＳＴ３７
(2)ＳＴ４１
(3)ＳＴ６２
(4)ＳＴ６３
(5) 墓石５
(6) 墓石６
(7) 墓石７
(8) 墓石２

Ⅰ．はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市西区大字金武 2023 番（地番）における金武小学校留守家庭子ども会施設改築に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成 27 年（2015 年）9 月 25 日付で受理した（事前審査番号 27－1－94）。これを受けて埋蔵文化財審査課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である都地遺跡に含まれること、確認調査において現地表下 60 ㎝で遺構が確認されていたことから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、施設改築部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。その後、平成 28 年 3 月 3 日付でこども未来局こども部放課後こども育成課と経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課で埋蔵文化財発掘調査に関する覚書を交わし、同年 3 月 14 日から発掘調査を、平成 29 年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。

2. 調査の組織

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査　平成 27 年度）

調査総括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課　課長　常松幹雄
調査第 2 係長　榎本義嗣

調査庶務：文化財部埋蔵文化財審査課管理係　横田忍

事前審査：埋蔵文化財審査課事前審査係文化財主事　福薗美由紀

調査担当：埋蔵文化財調査課調査第 2 係文化財主事　朝岡俊也

（発掘調査　平成 28 年度）

調査総括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課　課長　常松幹雄
調査第 2 係長　加藤隆也

調査庶務：文化財部埋蔵文化財課管理係　横田忍

事前審査：埋蔵文化財課事前審査係文化財主事　吉田大輔

調査担当：埋蔵文化財課調査第 2 係文化財主事　朝岡俊也

発掘作業：石井純子　井上節子　田中昭子　富永遵儀　樋口知徳　三角章夫　柳井順子
吉野一憲　和田裕見子

（整理・報告　平成 29 年度）

整理・報告総括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課　課長　常松幹雄
調査第 2 係長　大塚紀宜

整理・報告庶務：文化財保護課管理調整係　松原加奈枝

整理・報告担当：埋蔵文化財課調査第 2 係文化財主事　朝岡俊也

整理作業：執行恭子　中間千衣子　萩尾朱美

Ⅱ．遺跡の立地と環境

1．地理的環境

都地遺跡は福岡市の西部に位置し、二級河川室見川などの河川が形成した沖積扇状平野である早良平野の室見川中流西岸の河岸段丘上に立地する。遺跡の東に向かって日向峠を越えると糸島平野に出る交通の要衝であった。本調査区は遺跡南東側の段丘縁部に立地し、早良平野を一望できる。遺構面の標高は約 31.5m である。

2．歴史的環境

都地遺跡周辺の遺跡としてまず挙げられるのは、北に隣接する吉武遺跡群である。弥生時代には前期後半から後期にかけて大規模な集落・埋葬遺構がほぼ全域にわたって展開し、特に前期末～中期後半にかけて豊富な副葬品を有する木棺墓・甕棺墓で構成された「特定集団墓」が注目される。また、古墳時代中・後期には朝鮮半島系渡来人の存在を示唆する遺物が豊富に出土する。

古代では、乙石遺跡・都地遺跡・都地泉水遺跡・城田遺跡・浦江遺跡等で製鉄関連遺構群とそれに伴う公的施設と考えられる大型建物群が 7 世紀後半頃から展開する。近年では金武青木遺跡で「怡土城」「志麻郡」などと書かれた木簡が出土し、周辺一帯が奈良時代においては日向峠を超えて怡土城へ人や物資を供給する後方中継の拠点基地となったと考えられるようになった。

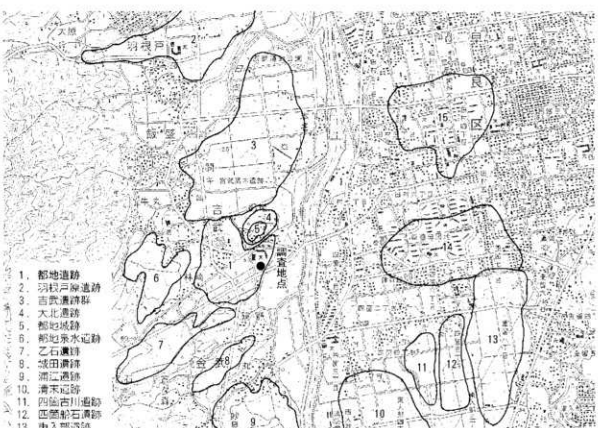


Fig.1　都地遺跡の位置（1/25000）

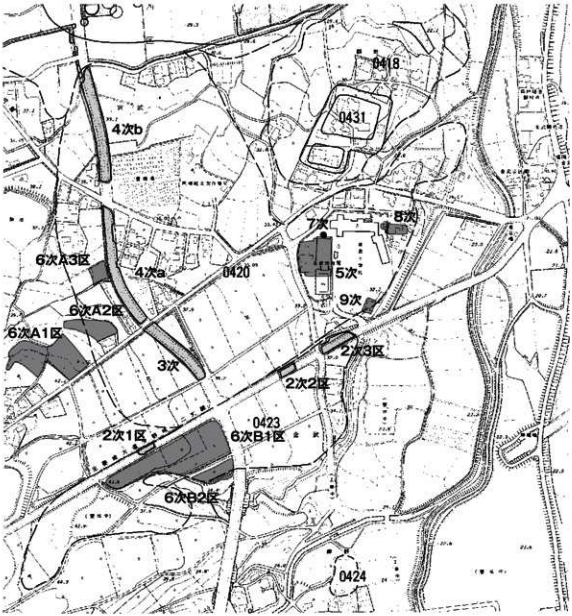


Fig.2　都地遺跡調査区位置図（1/5000）

Tab.1　都地遺跡発掘調査一覧

調査次数	調査年度	所在地	調査原因	報告書
1次	1975年	西区金武字都地（都地城跡）	畑地造成	市年報 Vol.27
2次	1980年	西区金武字都地	道路建設	市報 74 集
3次	1983年	西区金武字都地 1979	道路建設	市報 186 集
4次 a	1986年	西区吉武字衣屋田	道路建設	市報 223 集
4次 b	1986～1987年	西区吉武字七反田	道路建設	市報 223 集
5次	1993年	西区大字金武 2028-1	小学校講堂兼体育館改築	市報 434 集
6次	2005～2006年	西区大字吉武・金武地内	圃場整備・区画整理	市報 1016 集
7次	2007年	西区大字金武 2028-1	小学校物品庫改築	市年報 Vol.21
8次	2008年	西区大字金武 2028-1	小学校校舎増築	市報 1100 集
9次	2016～2017年	西区大字金武 2028-1	留守家庭子ども会施設改築	市報 1335 集

Ⅲ．調査の記録

1．調査の概要

第９次調査区は都地遺跡の南東側の段丘縁部に立地し、早良平野を一望できる。地表下 40 ㎝程で褐色の粘質土に達し、さらに地表下 60 ㎝で基盤の橙褐色粘質土になる。基本的には橙褐色粘質土上面を遺構面として調査を進めたが、一部で上層の褐色粘質土に掘り込まれた遺構を確認した（Ⅰ区北側）。遺構面の標高は約 31.5m であるが、弥生時代の柱穴の残りは浅く、やや後世の削平を受けていると考えられる。調査区の面積は 205 ㎡である。

本調査区では 40 基を超える墓からなる近世から近代の墓地や、弥生時代の柱穴を検出した。近世以降の墓地の存在は本調査開始時の表土剥ぎで判明した。調査不要とされることも多い遺構であるが、周辺市町村での調査例の増加、市内でも福岡城下町遺跡の調査の開始など、近年の近世以降の遺跡に対する認識の高まりもあり、今回は調査記録を実施することとした。墓の内容は甕棺墓が 27 基、早桶墓が 8 基、早桶墓か甕棺抜き取り坑か判断できない土坑が 11 基、長方形の掘方をもち木棺墓と考えられる土坑が 2 基である。地域の方々や学校関係者の話によると、ここは先祖代々の細川家の墓地だった場所で、1532 年に足利義輝の命でこの地に下向した細川五位尉藏人光行（細川若狭守光行）の墓も別の場所から調査区内（SR34 や SK77 あたり）に移されて存在したという。金武小学校は明治７年創立だが、南東側の本調査地は昭和の終り頃まで墓地として利用され、改葬の後、学校の敷地に編入された。表土中からは墓石がいくつか出土し、最も古いもので元文二年（1737 年）銘をもち、明治・大正の銘をもつものもあった。甕棺の編年などをもとにすると、今回検出した墓の時期は 18 世紀中頃～ 19 世紀を中心とし、木棺墓に関しては 17 世紀に上る可能性がある。

Fig.3　第９次調査区位置図（1/2000）

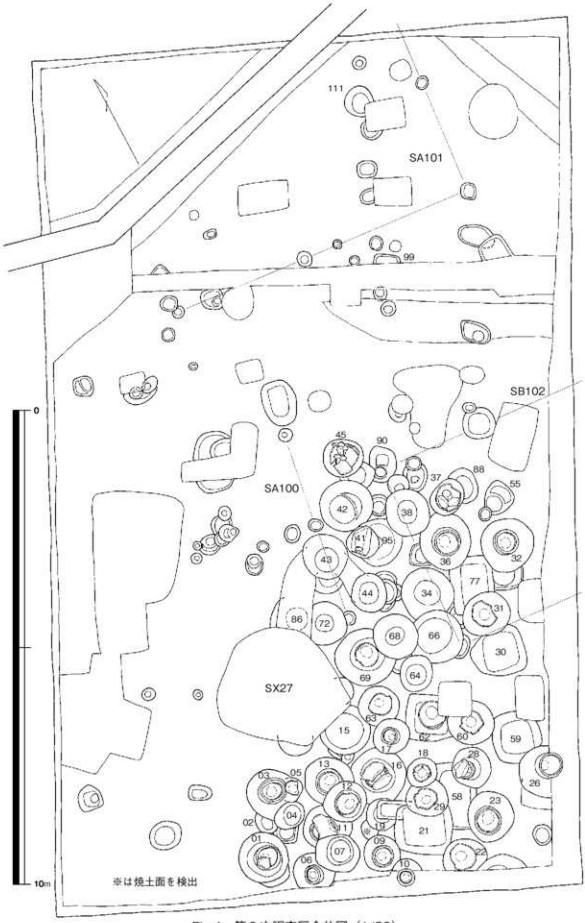


Fig.4　第９次調査区全体図（1/80）

2．甕棺墓

調査区の南東側に集中して、合計で 27 基を検出した。後に挙げるように早桶墓か甕棺抜き取り坑か判断できない土坑もあるため、実際の数は 30 基を超えると考えられる。上部が壊れている場合は、上部の破片を取り除いた後、図化した。また、遺構図中の人骨も比較的大きなものを選別して残し、図化した。多くの甕の内部より大小の石が出土したが、必ずしも全て図化していない。法量などは一覧表に掲載し、それ以外のことについて述べる。

ST01（Fig. 5・7 PL. 3・8）

成人棺。口縁端部には釉がかからず、目跡が残る。内面肩部以下にナデ消された格子目タタキの跡がある。

1 は鉄銭。口縁部直上より出土した。1739 年以降の寛永通宝鉄銭か。

ST03（Fig. 5・7 PL. 3・8）

成人棺。SK04･ST05 に切られる。甕の歪みが大きい。口縁端部には釉がかからず、目跡が薄く残る。比較的丁寧にナデ消されるが、内面に格子目タタキの跡がある。

ST05（Fig. 5 PL. 3）

小児棺。図面上でかなり広い掘方をもつが、これは ST03 の木蓋の落ち込みを ST05 の掘方と誤認したものである可能性がある。人骨は甕の内外から出土したが、内部から出土したのは歯のみである。断面は赤褐色になる甕が多いのに比べ、やや暗い紫味を帯び、胎土に混じりが少なく硬い印象を受ける。底部の器形は ST18 に近い。

Tab.2 甕棺墓一覧（数字の単位はcm）

番号		口縁最大径	器高	最大径	最大径高	底径	目跡	釉・色	人骨	人骨所見
ST01	成人棺	53	76	54	50	28	有	黒褐色 10YR3/2	○	
ST03	成人棺	50	76	55	51	29	薄	灰褐色 7.5YR4/2	○	男
ST05	小児棺	?	?	?	?	?	?	褐灰色 7.5YR4/1	○	
ST06	小児棺	34	50	37	32	19.5	有	にぶい赤褐色 5YR5/3	○	
ST09	中型棺	43	67	48	46		薄	灰褐色 5YR4/2		
ST10	小児棺	37	50	38	31	21.5	有	灰褐色 5YR4/2	○	
ST11	成人棺	52	70	53	49	29	有	灰褐色 7.5YR4/2	○	男　33 ～ 45 歳
ST12	成人棺	?	78	51	56	26	有	灰褐色 7.5YR4/2	○	25 ～ 45 歳位か
ST13	成人棺	54	76	59.5	50	28	有	灰褐色 5YR4/2	○	
ST16	成人棺	48	72	53	50	27	薄	にぶい赤褐色 5YR5/3		
ST17	小児棺	34	50	37	33	19	有	灰黄褐色 10YR4/2	○	幼児
ST18	小児棺	?	?	?	?	20	?	オリーブ褐色 2.5Y4/4	○	
ST22	成人棺	?	?	?	?	27	薄	にぶい黄褐色 10YR5/3	○	
ST23	成人棺	54	73	59.5	47	29	薄	黄褐色 2.5Y5/3	○	男
ST26	成人棺	50	80	55.5	55	23	薄	にぶい黄褐色 10YR5/3	○	
ST28	小児棺	35	51	38.5	34	19.5	有	暗褐色 10YR3/3		
ST29	成人棺	?	?	?	?	22.5	薄	灰褐色 7.5YR5/2	○	
ST31	成人棺	?	?	?	?	28	有	黒褐色 7.5YR3/2	○	
ST32	成人棺	49	73	54.5	49	27	有	暗赤褐色 5YR3/2	○	女　17 ～ 25 歳
ST36	成人棺	?	75	55.5	49	27	有	暗赤褐色 2.5YR3/2	○	
ST37	成人棺	?	?	?	?	27	?	にぶい黄褐色 10YR5/3	○	
ST41	小児棺	35.5	54	40.5	31	22	有	—	○	
ST45A	成人棺	?	?	?	?	?	薄	灰黄褐色 10YR4/2	○	
ST45B	成人棺	?	?	?	?	?	?	灰褐色 7.5YR4/2	○	
ST60	成人棺	?	?	?	?	27	薄	にぶい褐色 7.5YR6/3	○	
ST62	成人棺	?	73	?	49	28	無	灰赤色 2.5YR4/2		
ST63	成人棺	?	?	?	?	24	有	灰黄褐色 10YR4/2	○	女　17 ～ 25 歳
ST69	成人棺	?	?	?	?	27	有	灰褐色 5YR4/2	○	20 代位

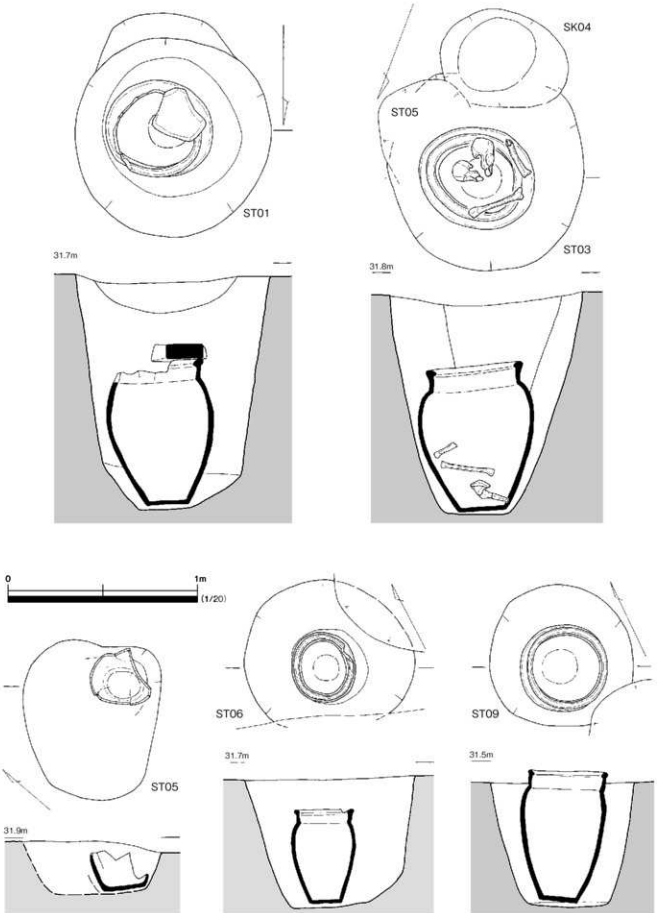


Fig.5　甕棺墓①(1/20)

２は棺内で出土した銅銭。寛永通宝。

ST06（Fig. 5・7 PL. 3・8）

小児棺。SK07 に切られる。口縁端部には釉がかからず、目跡が残る。内外面にナデ消された格子目タタキの跡がある。

３～６はガラス小玉。83 個出土したうち４つを選んで図化した。色調は緑色で径３～５㎜、厚さ２～３㎜。１つ１つ微妙に形が異なる。７は鉄釘。先端が折れている。

ST09（Fig. 5・7 PL. 3・8）

中型棺。ST10に切られる。口縁端部には釉がかからず、目跡が残る。頸部付け根も釉がかからない。内面肩部以下に板でナデ消された格子目タタキの跡がある。胎土は白色石粒をやや多く含み、比較的粗い。

８は鉄釘。木質が付着する。断面方形。

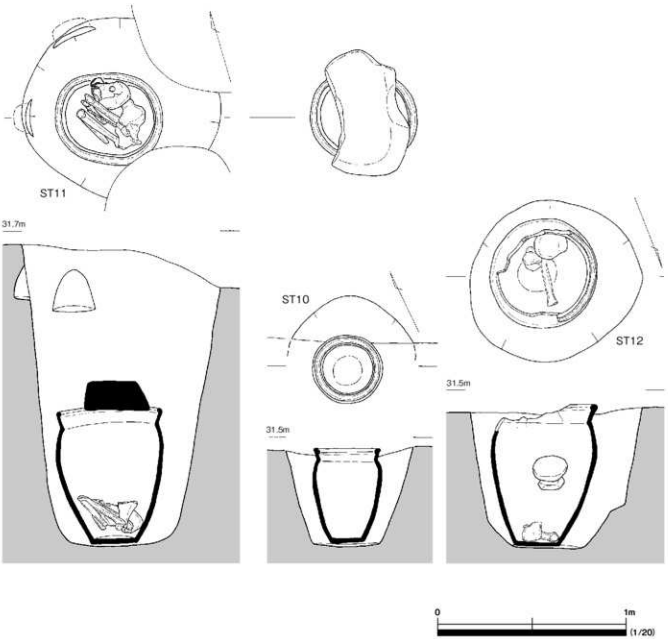


Fig.6　甕棺墓②（1/20）

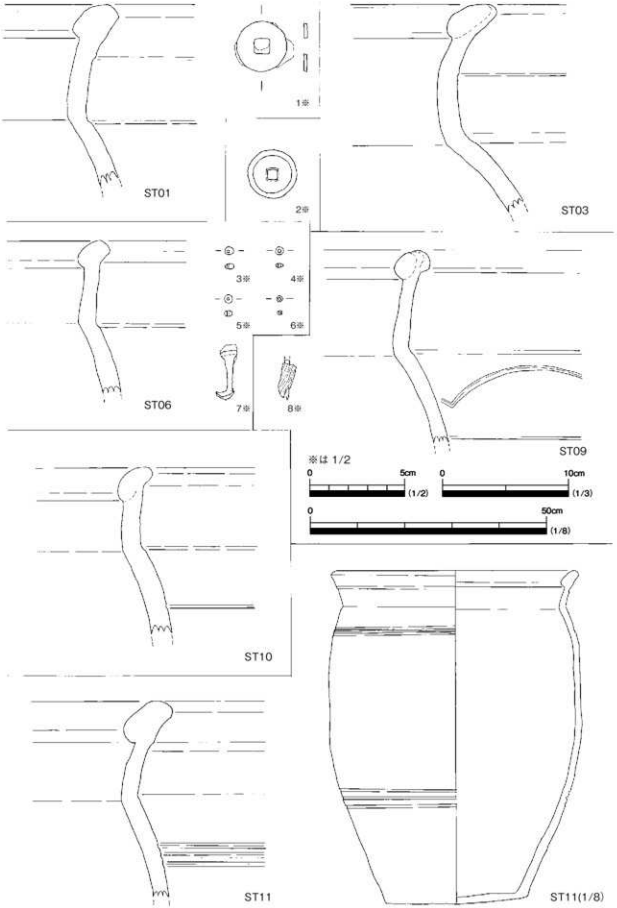


Fig.7　甕棺墓出土遺物①(1/2・1/3・1/8)

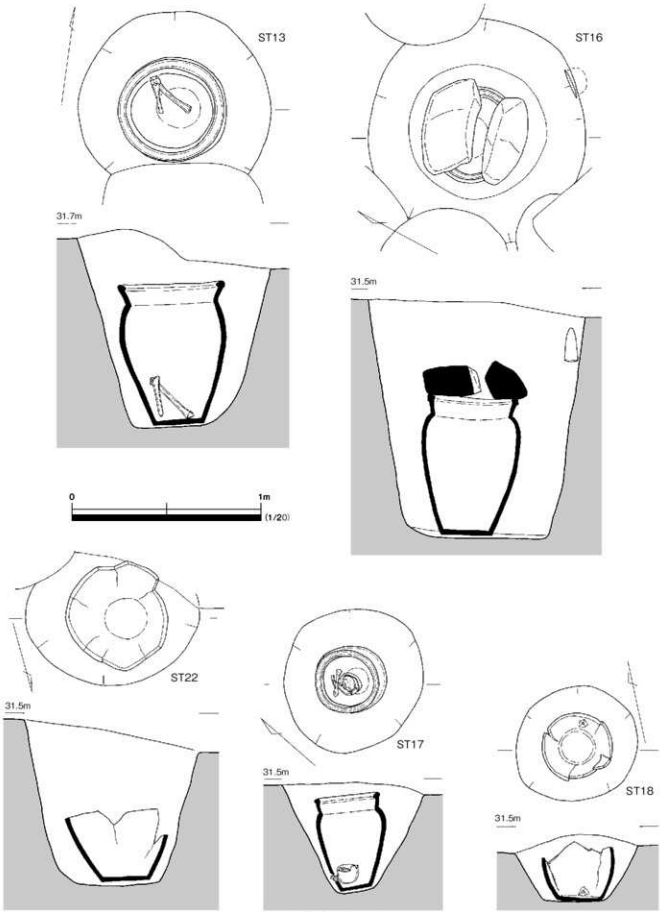


Fig.8　甕棺墓③(1/20)

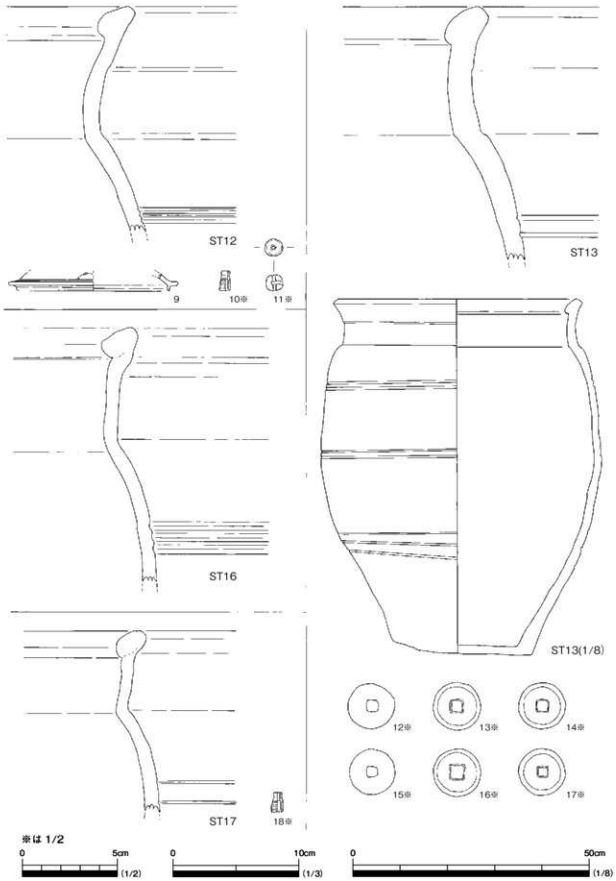


Fig.9　甕棺墓出土遺物②(1/2・1/3・1/8)

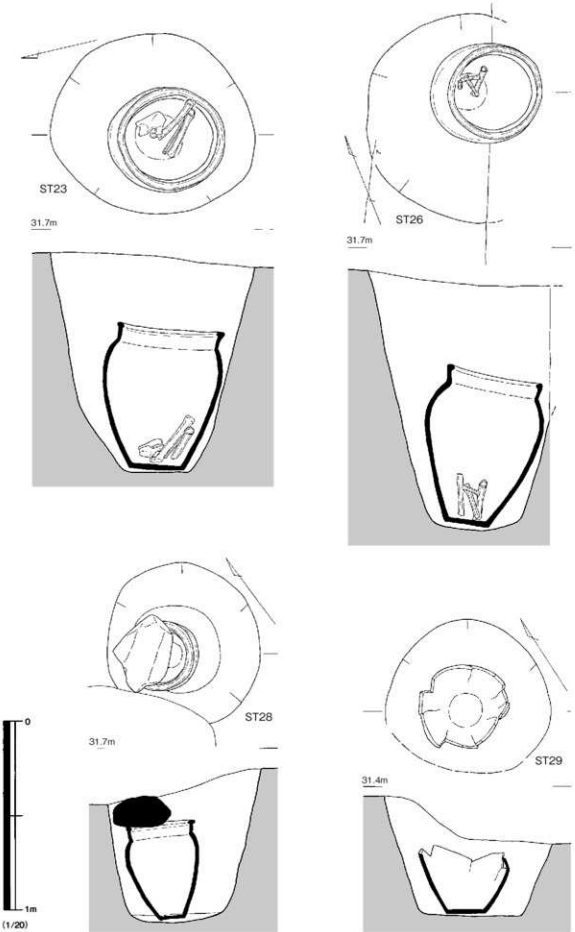


Fig.10 甕棺墓④(1/20)

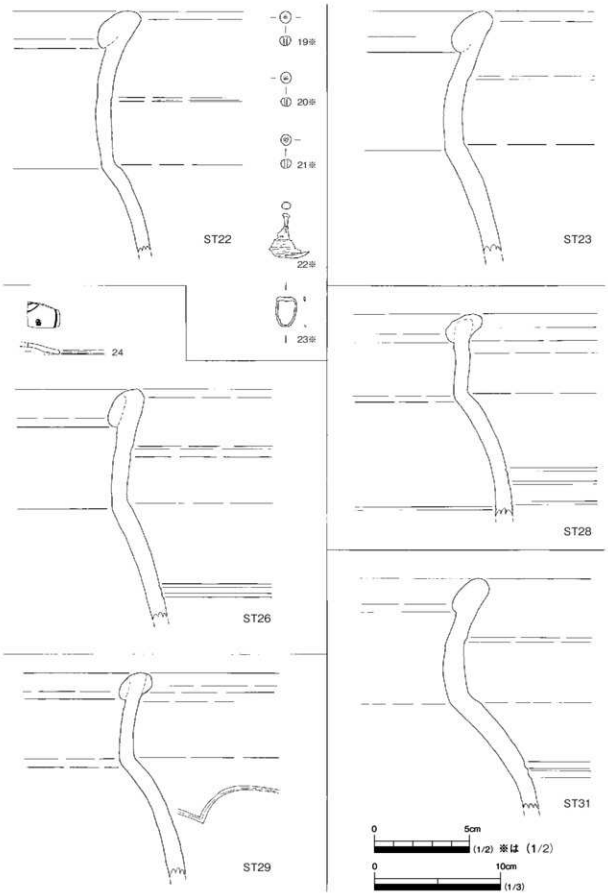


Fig.11 甕棺墓出土遺物③(1/2・1/3)

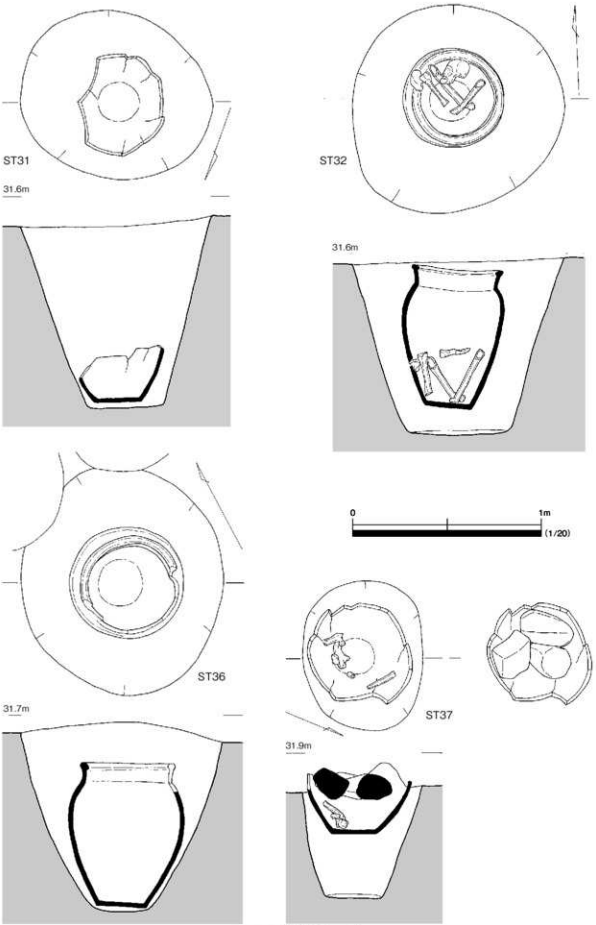


Fig.12 甕棺墓⑤(1/20)

ST10（Fig. 6・7 PL. 3・8）

小児棺。大きな石が中に落ち込んで出土した。口縁端部には釉がかからず、目跡が薄く残る。

ST11（Fig. 6・7 PL. 3・8）

成人棺。SK07・ST12 に切られる。平たい大石で蓋をし、口縁との間を粘土で目張りする。甕の歪みが大きい。掘方の壁面に足かけと考えられる穴が 2 か所ある。頭骨の乳様突起や後頭部隆起が発達せず、筋肉があまり発達していない印象を受ける。寛骨・脚骨の位置から、北西向きの正座の姿勢が想定される。甕は内面に螺旋状の刷毛目がみられ、外面は格子目タタキ痕を回転板ナデでナデ消す。口縁端部にも釉がかかり、目跡がくっきり残る。

ST12（Fig. 6・9 PL. 4・8）

成人棺。口縁端部に目跡が残る。断面は紫味を帯びるやや暗い色で、胎土は白色・赤色石粒をやや多く含み、比較的粗い。

9 は染付の口縁部小片。身受け部分を露胎とする。呉須の発色はやや薄い。10･11 は磁器製の数珠。10 はボサで型作り。11 は親玉。

ST13（Fig. 8・9 PL. 4・8）

成人棺。ST12 に切られる。口縁端部には釉がかからず､目跡が残る。頸部付け根も釉がかからない。内面肩部以下にナデ消された格子目タタキの跡がある。厚みがあり、重たい。

12 ～ 17 は床面直上で、髪の毛が引っ付いて出土した銅銭。12・13・14・15・17 は寛永通宝だが、傷みが激しく、「新古」は不明。16 は寛永通宝ではなさそうだが、傷みが激しく不明。

ST16（Fig. 8・9 PL. 4・9）

成人棺。大きな石を口縁に 2 つ乗せ、粘土で目張りする。掘方の壁面に足かけと考えられる穴が 1 か所ある。ST12･13･17 に切られる。格子目タタキのナデ消しは比較的丁寧だが､外面に少し跡が残る。内面頸部以下は灰かぶりが激しい。口縁端部まで釉がかかり、目跡が薄く残る。比較的釉は薄い。

ST17（Fig. 8・9 PL. 4・9）

小児棺。幼児の頭骨が残っており、それに覆い被さるように木質が遺存する。木質は木蓋が落ちたものであろう。頭骨は長さ 12cm、幅 10 ㎝程である。甕は口縁端部には釉がかからず、目跡が残る。内外面にナデ消された格子目タタキの跡がある。釉が比較的厚い。断面は比較的赤褐色だが、白味が多く混じる。

18 は磁器製の数珠ボサ。型作り。

ST18（Fig. 8 PL. 4・9）

小児棺。内面の底部見込に目跡のようなものがあり、陶器片が付着する。底部付近に外側から叩いて開けられた径 8 ㎜程の穴があり、水抜き穴だろうか。外面に回転板ナデの痕跡がある。釉は比較的厚い。底部の器形は ST05 に近い。

ST22（Fig. 8・11 PL. 4）

成人棺。ST23 との切り合いは不明である。口縁端部には釉がかからず、目跡が薄く残る。比較的丁寧にナデ消されているが、内面肩部以下に格子目タタキの跡がある。外面に回転板ナデの痕跡がある。釉は比較的厚い。

19 ～ 21 は合成樹脂製の玉。白色でわずかに透明感がある。22 は鉄釘で､木質を貫通後､折れ曲がる。断面円形。23 は不明銅製品。銅線を曲げて輪にしている。

ST23（Fig. 10・11 PL. 4・9）

成人棺。大きな石が中に落ち込んで出土した。寛骨が底面に近く、膝が上がっている状況から、胡坐の姿勢が想定される。甕は口縁端部には釉がかからず、目跡が薄く残る。内面肩部以下にナデ消さ

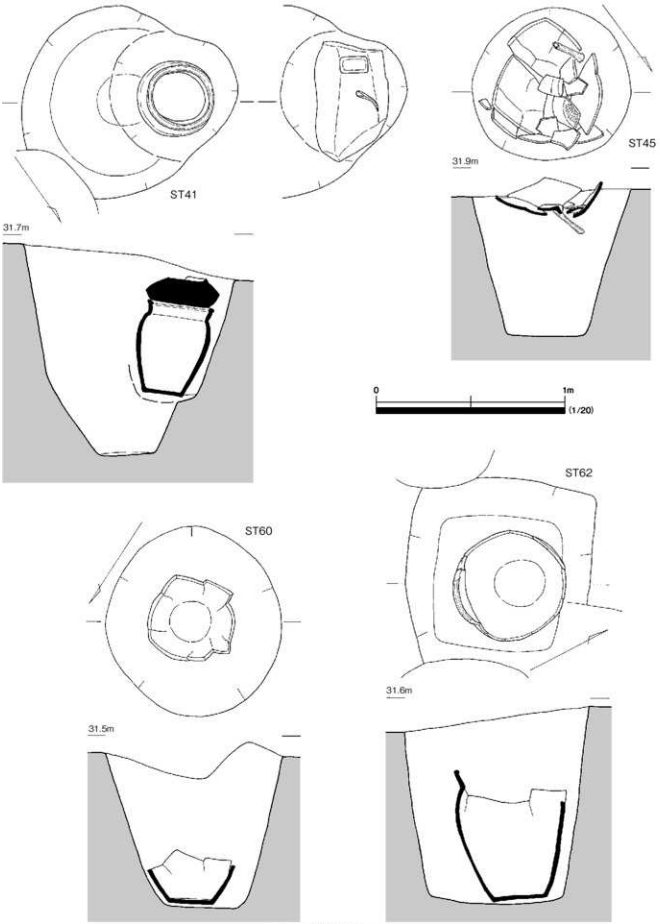


Fig.13 甕棺墓⑥(1/20)

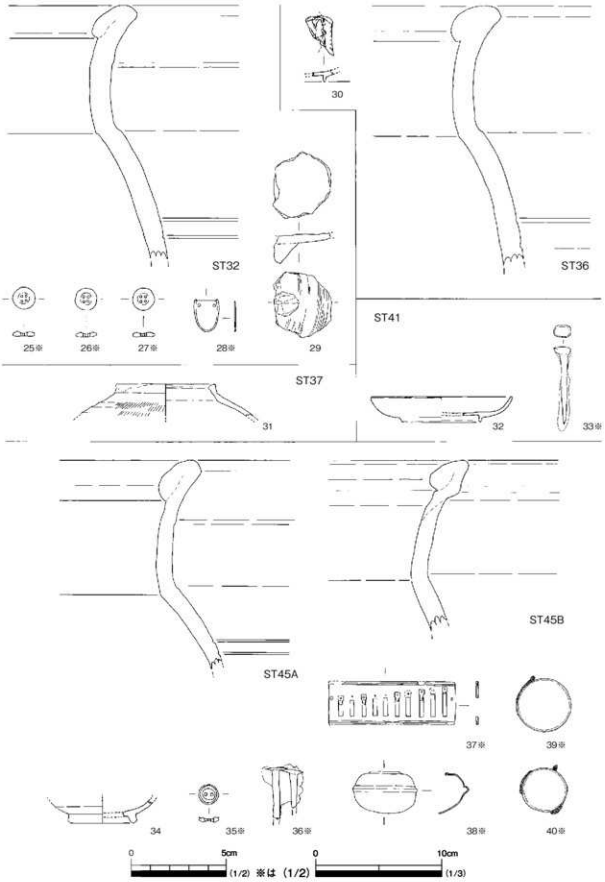


Fig.14 甕棺墓出土遺物④(1/2・1/3)

れた格子目タタキの跡がある。断面はやや白っぽく、釉は比較的厚い。

ST26（Fig. 10・11 PL. 5・9）

成人棺。人骨は骨太の印象である。口縁端部には釉がかからず、目跡が薄く残る。頸部付け根も釉がかからない。内面肩部以下にナデ消された格子目タタキの跡がある。

24 は棺外上層出土の国産陶器蓋小片。上面に化粧土を施し、黒褐色の線と淡緑色の点を彩画して薄く透明釉をかける。胎土は精良で、やや軟質。

ST28（Fig. 10・11 PL. 9）

小児棺。大きめの石で蓋をする。口縁端部にも釉がかかり、目跡がはっきり残る。断面は暗い紫味を帯びた色で、胎土は混じりが少なく、硬い印象を受ける。タタキ痕は丁寧にナデ消される。

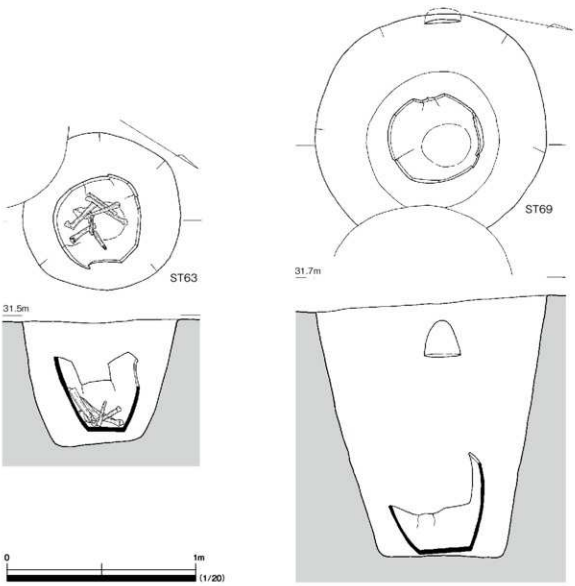


Fig.15 甕棺墓⑦(1/20)

ST29（Fig. 10・11　PL. 5）

小児棺～中型棺。SD20 に破壊され、ひしゃげている。口縁端部は釉が薄く、目跡が薄く残る。内面肩部以下にナデ消された格子目タタキの跡がある。釉は比較的薄い。

ST31（Fig. 11・12　PL. 5）

成人棺。甕内部に大きな石がゴロゴロ入る。口縁端部には釉がかからず、目跡が残る。内面肩部以下にナデ消された格子目タタキの跡がある。

ST32（Fig. 12・14　PL. 5・9）

成人棺。脚骨の配置だけをみると胡坐の姿勢が想定されるが、寛骨が比較的上位から出土している。大きな石が内部に落ち込んで出土した。口縁端部は釉が薄く、目跡が残る。頸部付け根も釉がかからない。内面肩部以下に板でナデ消された格子目タタキの跡がある。

25 ～ 27 は合成樹脂製のボタン。白色でわずかに透明感がある。28 は銅製の足袋のコハゼ。人骨の所見をあわせ、被葬者は洋服を着て足袋を履いた若い女性と推測される。29 は陶器で、脚付きの皿・鉢などか。灰茶色。周囲を故意に打ち欠いた可能性がある。

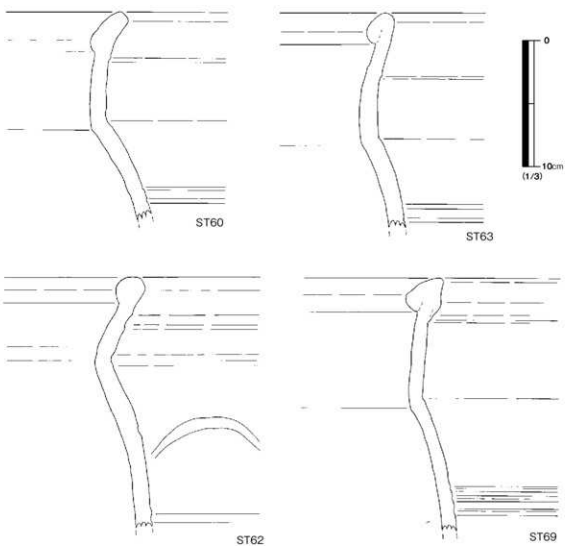


Fig.16 甕棺墓出土遺物⑤(1/3)

ST36（Fig. 12・14 PL. 5・9）

成人棺。ST37・SR38 との切り合いは不明確である。口縁端部は釉が薄く、目跡が残る。頸部付け根も釉がかからない。内面頸部以下にナデ消された格子目タタキの跡がある。

30 は染付細片。32 と同一個体か。

ST37（Fig. 12・14 PL. 5・10）

成人棺。甕はひしゃげている。甕棺底部よりさらに30～40㎝程掘り込まれており、甕棺を抜き取った後、そこに甕棺を廃棄したものと考えられる。人骨は骨太の印象である。

31 は国産陶器土瓶。口縁部～外面にやや濁る透明釉を施釉し、口縁端面の釉をふき取る。外面肩部に細長い連続刺突文を施す。

ST41（Fig. 13・14 PL. 5・6・10）

小児棺。当初は SK95 と一連のものと認識していたが、掘り下げに伴い二つが切り合っていると明らかになった。甕内部いっぱいの骨と新そうなポーチが入れられており、改葬時に集骨したものと考えられる。石蓋と口縁の間に粘土による目張り等はない。

32 は棺外上層出土の染付皿。口錆で、内面に除印刻を施す。呉須は明るい紺色に発色する。33 は棺外上層出土の鉄釘。

ST45（Fig. 13・14 PL. 6）

成人棺。甕はひしゃげている。底部が上になっている点や、2 個体の甕片が入っている点からも、甕棺を抜き取った後、そこに甕棺を廃棄したものと考えられる。人骨や銅銭は甕直下に近いところから出土した。A とした甕は口縁端部は釉が薄く、目跡が薄く残る。内面肩部以下にナデ消された格子目タタキの跡がある。釉は比較的厚い。断面の色はやや暗い。B とした甕は口縁端部まで釉がかかり、目跡が目立たない。断面の色はやや青味を帯びる。

34 は国産陶器底部。淡灰黄色でやや軟質。35 は合成樹脂製ボタン。36 は鉄釘。37 はブルースハープ（10 穴ハーモニカ）の銅製のリードプレート。38 は鈴の破片にみえるが、きれいな形に切り取られている。39・40 は銅銭。2 枚重ねで布（小袋か）に入った状態で出土。穴はない。傷みが激しく、種類は不明。

ST60（Fig. 13・16 PL. 6）

成人棺。ST62 との切り合いはやや不明確である。口縁端部には釉がかからず、目跡が薄く残る。頸部付け根も釉がかからない。内面肩部以下にナデ消された格子目タタキの跡がある。

ST62（Fig. 13・16 PL. 6・10）

成人棺。本調査区の甕棺墓で唯一の方形掘方であるため、早桶墓と重なっている可能性も考えたが、掘方の底と甕の底の高さが合うため、甕棺の掘方で間違いないだろう。ST17 に切られるが、ST60 との切り合いはやや不明確である。口縁端部にも釉がかかり、目跡が確認できない。内面は螺旋状の刷毛目がみられる。胎土は他と明らかに異なり白色石粒を大量に含み、粗くもろい印象を受ける。

ST63（Fig. 15・16 PL. 6・10）

成人棺。口縁端部には釉がかからないが、その幅はわずかである。目跡がはっきり残る。内面肩部以下にナデ消された格子目タタキの跡がある。釉は比較的厚い。

ST69（Fig. 15・16 PL. 6）

成人棺。掘方の壁面に足かけと考えられる穴が 1 ヵ所ある。口縁端部まで釉がかかり、目跡がはっきり残る。内外面は丁寧な板ナデで格子目タタキ痕があまり確認できない。比較的釉は薄い。

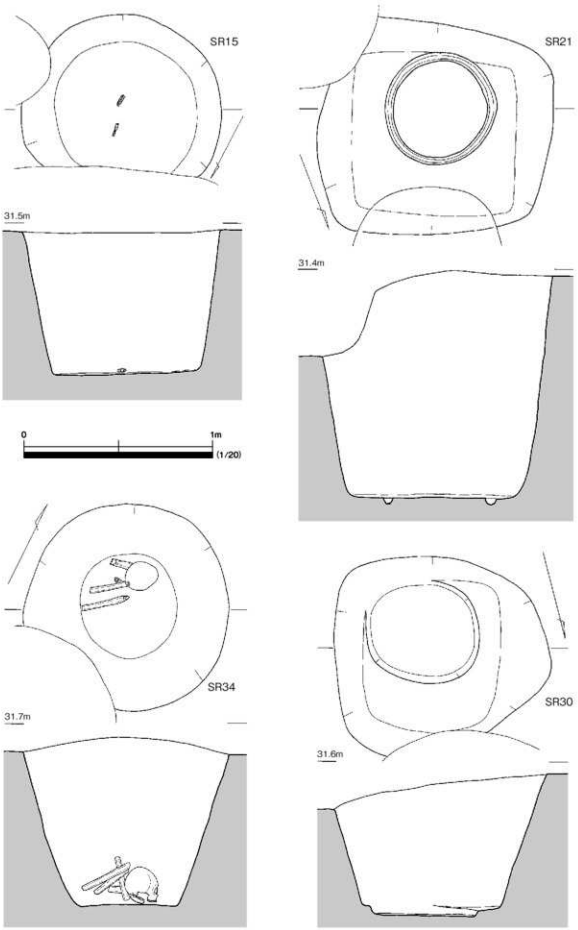


Fig.17 早桶墓①(1/20)

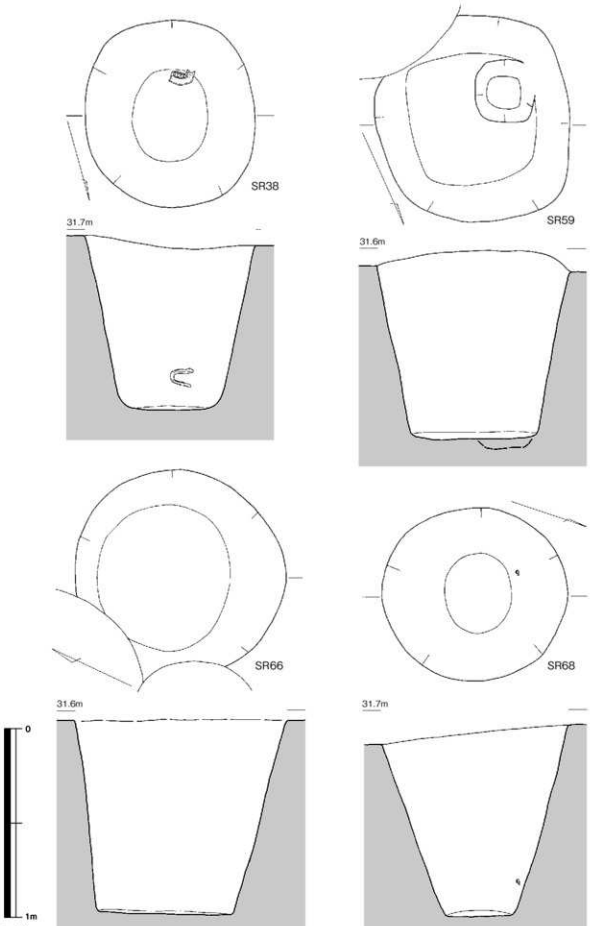


Fig.18 早桶墓②(1/20)

3．早桶墓

甕棺抜き取りと判別しづらいものもあるが、8基を早桶墓と判断した。

SR15（Fig. 17・19 PL. 6）

円形の掘方をもつ。床面で歯とキセル、および図化していないが木片が出土した。歯の摩耗から年齢は20歳前後とみられる。下端はきれいな円形を呈し、早桶墓と判断した。ST63に切られる。

41は銅製のキセル。中に竹が残る。18世紀中頃～後半位か。42はガラス玉。黄色味を帯び、半透明。

SR21（Fig. 17 PL. 6）

方形の掘方をもつ。底面に径60㎝程の桶の圧痕が残る。ST22・29に切られる。

SR30（Fig. 17・19）

方形の掘方をもつ。床面に径 60 ㎝程の桶の圧痕が残る。図化していないが、人骨が出土した。ST31に切られる。

43はガラス玉。淡緑色でやや透明感のあるベース生地に白色の縞が渦状に入る。

SR34（Fig. 17・19 PL. 7）

円形の掘方をもつ。底面付近で頭骨と四肢骨の一部が出土した。歯の摩耗から年齢は25～35歳位とみられる。底の中心がやや上がるは桶の圧痕を認識できなかったためだろうか。SR66 との切り合いは不明確である。

44は銅製のボタン。45は鉄釘。

SR38（Fig. 18・19 PL. 7）

円形の掘方をもつ。下顎骨が出土した。歯の摩耗から年齢は33～45歳位とみられる。

46・47は磁器製の数珠。46はボサで型作り。47は親玉。

SR59（Fig. 18・19）

方形の掘方をもつ。ST26に切られる。

48は国産陶器火入れか。釉は黒褐色で外面体部下位まで施釉し、高台付近および内面は露胎。

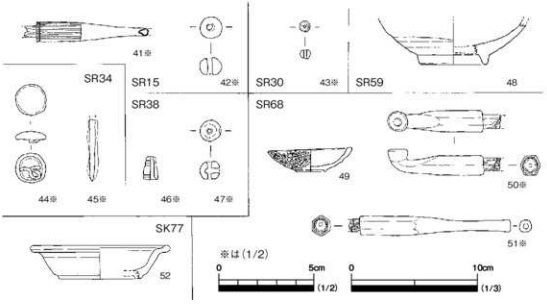


Fig.19 早桶墓・木棺墓出土遺物（1/2・1/3）

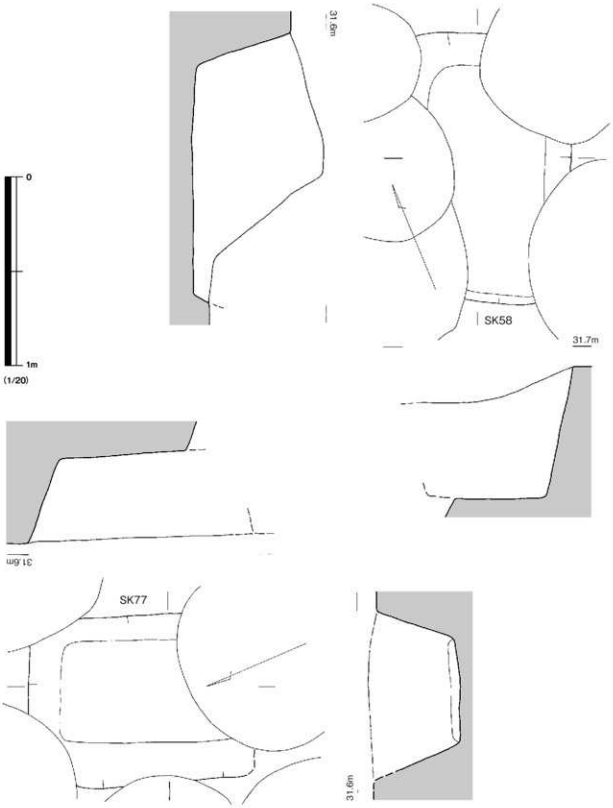


Fig.20 木棺墓（1/20）

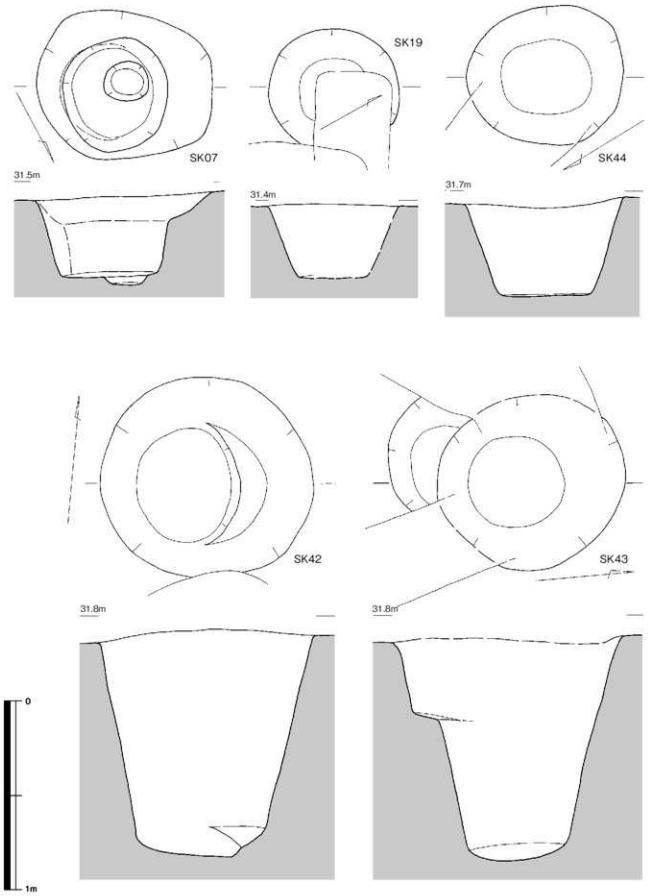


Fig.21 不明土坑①(1/20)

SR66（Fig. 18　PL. 7）

円形の掘方をもつ。SK64・SR68 に切られる。

SR68（Fig. 18・19）

円形の掘方をもつ。図化していないが、人骨が出土した。ST69 を確実に切る。

49 は白磁の紅皿。外面に型打ちで陽刻蟠唐草文を施す。19 世紀後半頃。50・51 は銅製のキセル。中に竹が残る。19 世紀前半頃。

4．木棺墓

軸を揃えた長方形の土坑を 2 基検出し、木棺墓と判断した。甕棺墓・早桶墓に切られる。

SK58（Fig. 20）

SK77（Fig. 19・20）

52 は国産陶器皿。胎土は黄白色で、灰色・褐色の砂粒を含み、やや粗い。釉は灰緑色の透明で、光沢が強い。畳付と内面見込みに目土が残る。小片のため、径はやや不明確である。中世末の瀬戸産陶器の可能性が高く、地域の方の聞き取りにより SK77 付近に存在した（別の場所から移された）とされる細川五位尉蔵人光行の墓に関連する可能性がある。

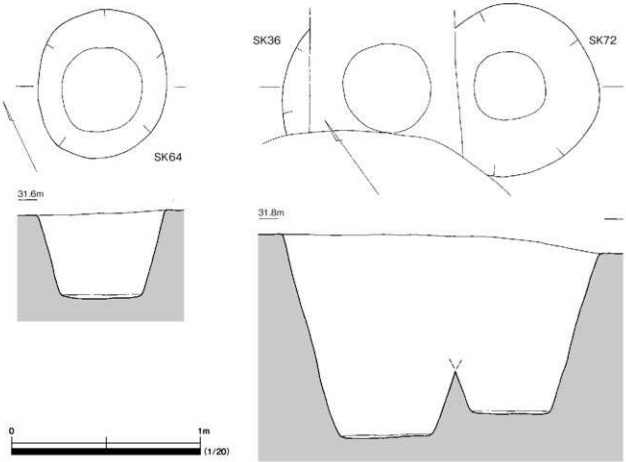


Fig.22 不明土坑②(1/20)

5．不明土坑

早桶墓か甕棺抜き取り坑か判断できない土坑である。

SK07（Fig. 21・23）

甕棺を全て切る。底に甕の底部程の窪みがあり、甕棺の抜き取り痕か。

53 ～ 58 は鉄釘。53 ～ 56 は規格が揃い、断面は円形である。

SK19（Fig. 21）

平面形が正円に近いすり鉢状を呈す。

SK42（Fig. 21・23）

底の径が 60 ㎝であることを考慮すれば、桶の痕跡の可能性が高いが、底が平らでなく、段がつく点は甕棺抜き取りの可能性も高い。甕棺片が出土した。

59 は鉄製の蓋。

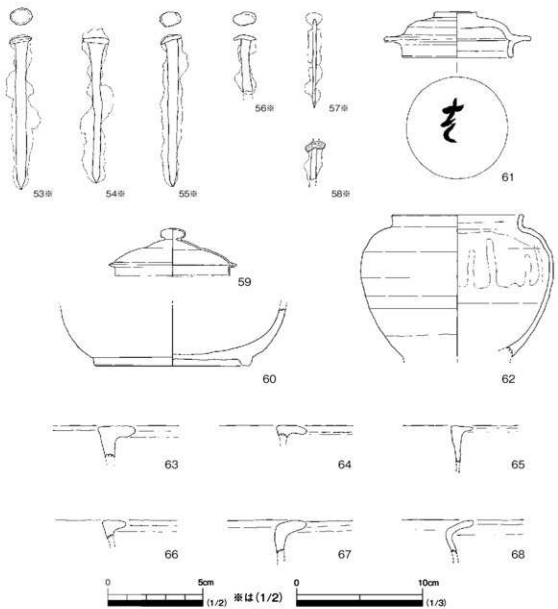


Fig.23 不明土坑・その他の遺構・柱穴出土遺物（1/2・1/3）

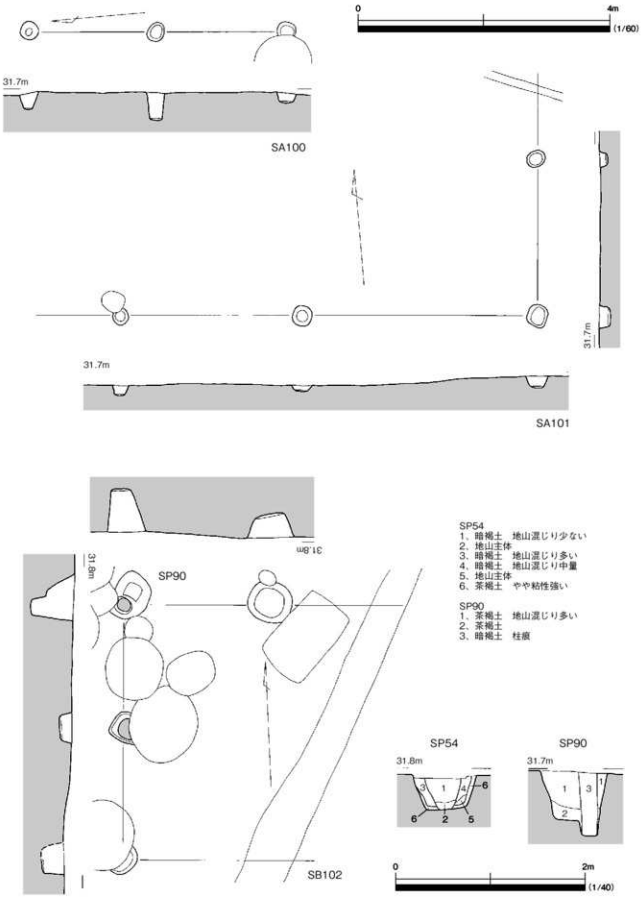


Fig.25 建物・柵列の可能性のある柱穴列①(1/40・1/60)

SK43（Fig. 21）

不明土坑が切り合う。

SK44（Fig. 21）

甕棺片と大正8年銘の墓石（墓石1）が出土した。

SK57（Fig. 23）

当初、SR21・ST29を切る土坑と考えたが、SR21の桶の蓋の落ち込みである可能性が高い。

60は無釉の陶器で、淡橙色を呈す。

SK64（Fig. 22）

平面形が円形のすり鉢状を呈す。

SK72・86（Fig. 22）

切り合いは不明である。

6．その他の遺構

SX27（Fig. 23　PL. 7）

墓石等の石が詰まっており、廃棄土坑と考えられる。改葬時のものか。

61・62はセットの壺で骨壺か。暗褐色で光沢の強い不透明釉がかかる。61の内面に墨書がある。

7．建物・柵列の可能性のある柱穴列

近世以降の墓地に関連するほとんどの遺構埋土が締まりがないのに対し、柱穴の埋土は締まりがあり、弥生土器を出土するものが多かった。よって、少なくとも何らかの構造物が弥生時代に存在したと考えられる。

SA100（Fig. 25）

柵列の可能性がある。

SA101（Fig. 25）

柵列の可能性がある。

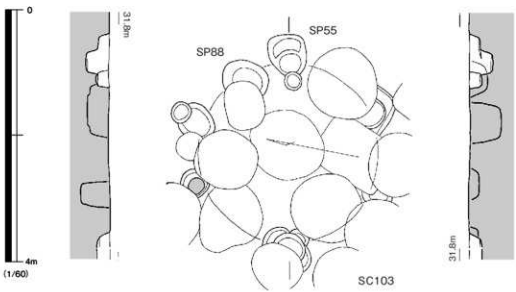


Fig.26 建物・柵列の可能性のある柱穴列②(1/60)

SB102（Fig. 23・25）

掘立柱建物の可能性がある。66 は SP90 出土。

SC103（Fig. 23・26）

円形竪穴建物の可能性がある。64 は SP55 出土。65 は SP88 出土。

8．その他の遺物（Fig. 27）

63 ～ 68 は柱穴出土の弥生土器。69 は須恵器。70 は白磁。71 は同安窯系青磁。72 は土師質で、表面が平滑である。塼か。73 は染付小坏か。外面に染付とイッチン描きを施す。胎土は灰色で、釉は透明度が低い。下位に刻線を入れ、褐釉をかける。74 は白磁皿か。灰色味を帯び、不透明な釉を内外に厚くかける。胎土は淡灰色で、緻密。75･76 は染付。77 は石包丁。78 は不明石製品。石材は玄武岩で、角閃石(？)を多く含む。79 は黒曜石の縦長の剥片。使用痕のような微細剥離がみられる。80･81 は鉄滓。ともに ST01・03 付近で出土した。80 は表面が流出滓状で、磨滅する。比較的重量感があり、滓に多くの鉄分が含まれている可能性が高い。42.8g。81 は 27.3g。

9．墓石（Fig. 28 ～ 31）

墓石 1 は SK44 出土。墓石 2・3・4 は SX27 出土。墓石 5 ～ 10 は表土出土。

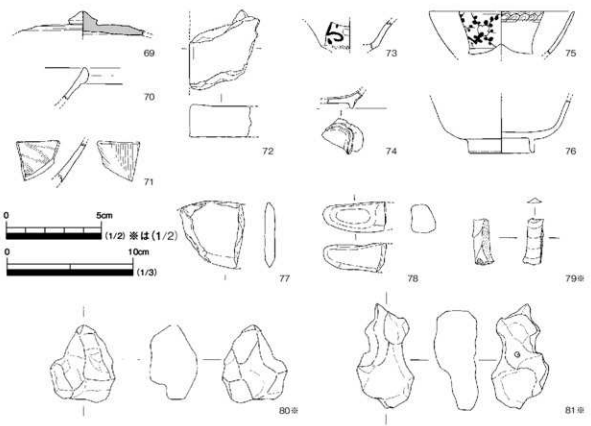
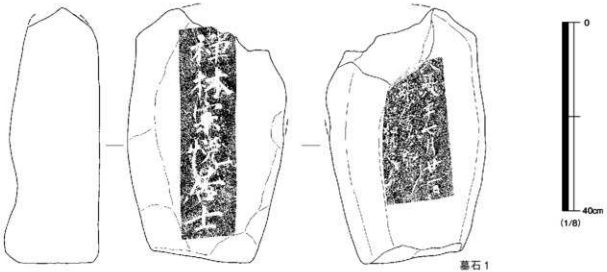
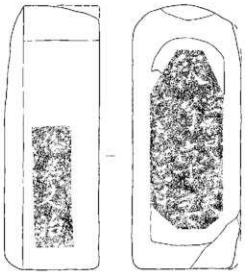


Fig.27 その他の遺物（1/2・1/3）



墓石1



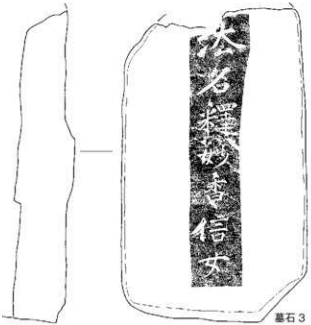
墓石2

墓石1　禅林宗悦居士
大正八年七月廿二日
柴戸富次郎
細川兵？■■

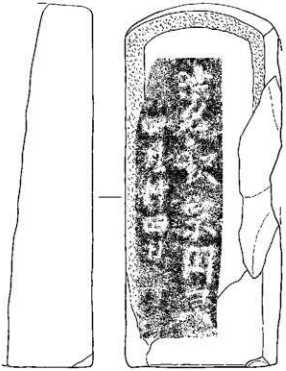
墓石2　宝暦八寅？天
釈了尊？■
一？月十三日
俗名文治

墓石3　法名釋妙香信女

墓石4　法名釈宗円ヨ？
四月廿四日

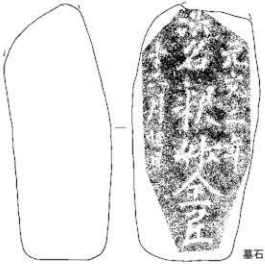


墓石3

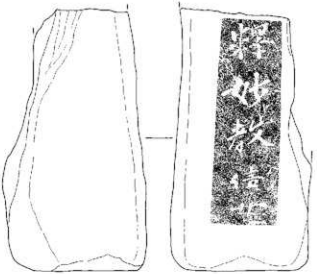


墓石4

Fig.28 墓石①(1/8)



墓石5



墓石6

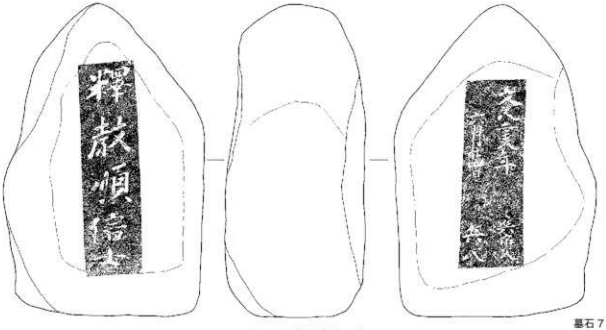
墓石5　元文二年
　　法名釈妙？全■
　　十二月廿日

墓石6　釋妙教信女
　　嘉永六年　　兵市
　　■十月廿四日　母

墓石7　釋教？順信士
　　文久亥？年　　兵市父
　　六月廿四日　　兵八

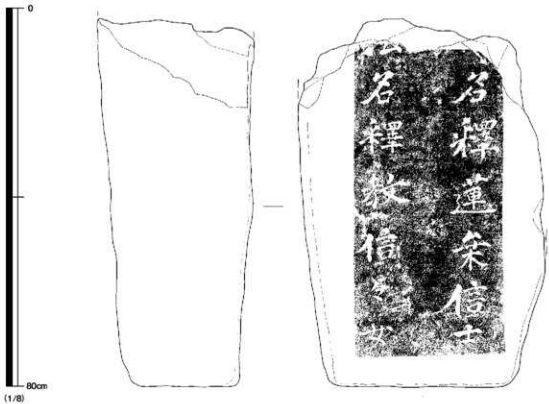
0

40cm
(1/8)



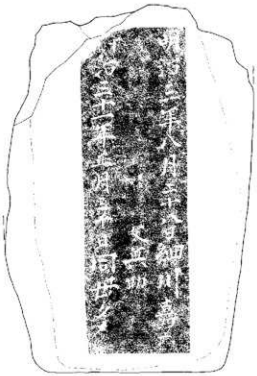
墓石7

Fig.29 墓石②(1/8)



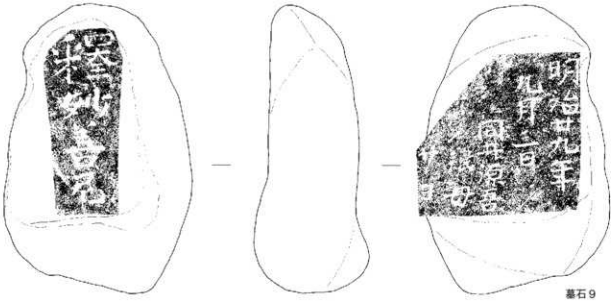
法名　釋蓮榮信士
法名　釋敎信々女

明治三年八月二十八日　細川嘉六
父兵助
明治三十一年正月三十日同年母ヶ？



墓石８

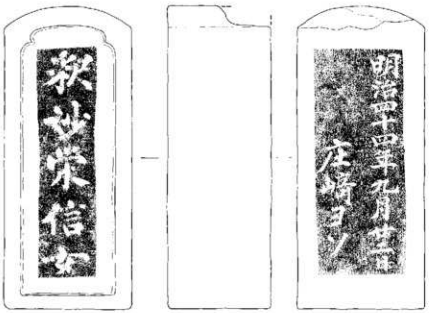
Fig.30 墓石③(1/8)



墓石9

墓石9　釋妙善尼
明治廿九年
九月三日
熊井源吾
琅母サヨ

墓石10　釈妙栄信女
明治四十四年九月廿二日
庄崎ヨソ



墓石10

0　80cm
(1/8)

Fig.31 墓石④(1/8)

Ⅳ．考察

1．墓地の変遷

まず、甕棺墓（成人棺）と早桶墓の掘方を以下のように分類する。

方…掘方の平面形が方形を呈す

円…掘方の平面形が円形を呈す

Ⅰ類…壁が垂直に近く、甕棺・早桶が入るスペースにゆとりがある。掘削深度も深い。

Ⅱ類…Ⅰ類とⅢ類の中間形態

Ⅲ類…壁が斜めになり、甕棺・早桶が入る必要最低限の掘削しか行わない。掘削深度は浅い。

掘方は切り合い関係から方Ⅰ類→円Ⅰ類→(円Ⅱ類)→円Ⅲ類と変化する。

次に甕棺そのものについて、成人棺をＡ類、中型棺をＢ類、小児棺をＣ類とする。

Ａ類（成人棺）は下村智氏の分類を参考に、口縁部形態より以下のように分類する。

ＡⅠ類…口縁内面を玉縁状に肥厚するもの（下村Ⅲ類）

ＡⅡ類…口縁端部が「コ」の字状に外方に突出するもの（下村Ⅴ類）

Ｃ類（小児棺）は底部形態より、以下のように分類する。

ＣⅠ類…外面形態が底付近で内湾するもの

ＣⅡ類…外面形態が底付近で外湾するもの

これらの分類を踏まえ、作成した属性表がTab.3である。

属性表および切り合い関係などを基に墓地の変遷を考える。

Ⅰ期（SK58・SK77）

2 基の木棺墓が掘削される。2 基は軸が揃うが、間が 3m 離れており、1 つの墓が墓地の中で占有する面積が広かったと考えられる。

時期は出土した 52 から中世末以降であることは間違いない。ただし、埋土に締まりはなく、中世まで遡ることはないように思われる。

Ⅱ期（ST62・SR21・SR30・SR59）

調査区の南側隅部にまとまって方Ⅰ類の掘方をもつ甕棺墓・早桶墓が掘削される。1 つの墓が墓地の中で占有する面積は狭くなったと考えられるが、1m 程の一定の距離を置いており、ある程度規格に沿った墓の配置が想定される。一部でⅠ期の木棺墓を壊しており、Ⅰ期とはある程度時期差があると考えられる。

ST62 は方形の掘方をもつ唯一の甕棺墓だが、内側に螺旋状の刷毛目がみられ、目跡がなく、胎土も粗いなど、他と明らかに異なる古い要素をもつ。ただし、肩部の波状沈線はやや新しい要素である。下村氏の分類ではⅢa 類とⅢb 類の中間形態となり、時期は 18 世紀中頃（1750 年前後）と推測される。

Ⅲ期（ST11・ST16・ST69・SR15・SR66）

Ⅱ期の墓の周りを囲むようにして円Ⅰ類の掘方をもつ甕棺墓・早桶墓が掘削される。1 つの墓が墓地の中で占有する面積はさらに狭くなり、規格に沿った配置もみられない。Ⅱ期の墓を壊さずに墓域を拡大しており、Ⅱ期との時期差はあまりないと考えられる。

甕棺は①大きな石で蓋をし、隙間を粘土で目張りする、②口縁端部まで施釉し、目跡が残る、③上部（肩部）に 3 本の沈線を施す、などの特徴が共通する。下村氏の分類では ST11 がⅢb 類、ST16・ST69 がⅤc 類にあたり、時期は 18 世紀後半となろう。SR15 で出土したキセルの時期とも矛盾しない。

Ⅳ期（その他の甕棺墓・早桶墓）

時期幅が長く、多くの甕棺墓・早桶墓が掘削される。小児棺は全てこの時期に属する。墓地の範囲も北側に拡大する。ある程度均等な位置関係で掘削されるが、規則に沿った配置は認められない。Ⅲ期の墓を壊して掘削される。

この中で ST12 は口縁端部まで施釉する、上部に 3 本の沈線を施すなどの比較的古い属性をもつが、頸部付け根の釉をふき取るなどの比較的新しい属性をもつ ST13 を切っており、甕が製作されてから埋設されるまでに一定期間があると考えられる。

ST26 は胴の張りが弱く、器形が高い細長い形態を呈する。下村分類のⅢd 類にあたり、18 世紀末以降の時期と考えられる。ST68 出土のキセルや紅皿も 19 世紀のものと考えられ、Ⅳ期の開始は 19 世紀とみてよい。

ST37・ST41・ST45 は改葬に伴う遺構だろうか。ブルースハーブなど明らかに新しい遺物が入っている。実際に墓が掘削された下限を示すのは、合成樹脂（プラスチック）や足袋のコハゼなどが出土した ST22 や ST32 と考えられ、明治期から大正期であろう。その後、墓地は昭和の終り頃まで存続したが、遺構としては残らない深さの墓の形態に変化したと考えられる。

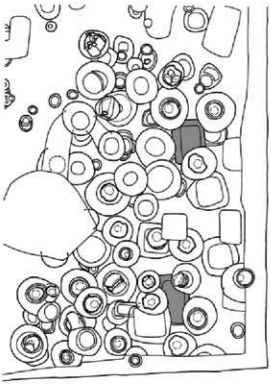
2．調査のまとめ

今回の調査では、甕棺墓や早桶墓の掘方の変化、また甕棺自体の変化に着目することで、墓地の変遷をある程度明らかにすることができた。甕棺自体の変遷は甕の製作年代を示すものなので、墓地の変化を明らかにするために、掘方の分析は有効であると考える。調査では古い要素をもつ甕棺の掘方が、新しい要素をもつ甕棺の掘方を切る場合もみられ、甕棺の製作年代が墓の掘削年代に必ずしも直結しないことには注意しておきたい。

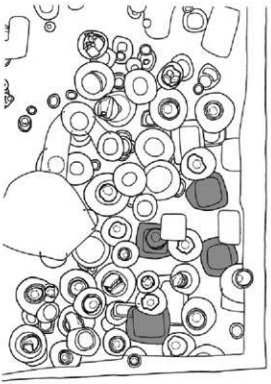
弥生時代の遺構に関しては、柱穴を検出した。後世の墓地に大きく破壊され、建物の様相は明確ではないが、柱痕跡のある柱穴もあり、弥生時代中期の何らかの施設が存在したことは間違いない。

【参考文献】
下村智 1994「北部九州の近世墓に使用される棺甕について」
『先史学・考古学論究』熊本大学文学部考古学研究室創設 20 周年記念論文集
江戸遺跡研究会編 2001『図説　江戸考古学研究事典』柏書房

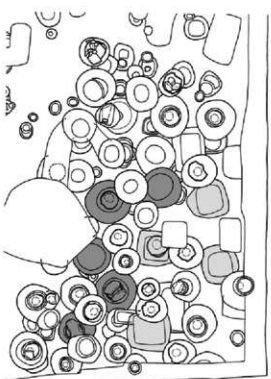
※遺物に関し、以下の方々にご教示を賜った（順不同、敬称略）。
榎本義嗣　山崎龍雄　吉田大輔



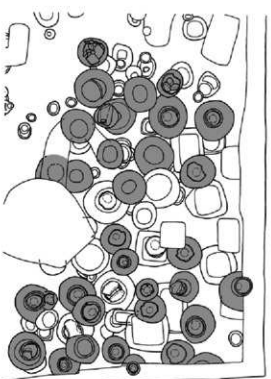
Ⅰ期（17～18世紀前半）



Ⅱ期（18世紀中頃）



Ⅲ期（18世紀後半）



Ⅳ期（19世紀以降）

Fig.32 墓地変遷図

Tab.3　甕棺属性一覧

	番号	法量	口縁	掘方	蓋	目跡	頸部	釉	刷毛	器壁	沈線	口縁	最大径	器高	最大径	最大径	高	底径	釉・色
Ⅱ期	ST62	A Ⅰ		方Ⅰ	?	1	1	普	○	普	2※2・0・0	?		73	?	49		28	灰赤色 2.5YR4/2
	SR21	—		方Ⅰ	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—		—	—
	SR30	—		方Ⅰ	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—		—	—
	SR59	—		方Ⅰ	—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—		—	—
Ⅲ期	ST11	A Ⅰ	円Ⅰ		石	2	1	普	○	薄	3・0・3	52		70	53	49		29	灰褐色 7.5YR4/2
	ST16	A Ⅱ	円Ⅰ		石	2	1	薄	—	薄	3・3・0	48		72	53	50		27	にぶい赤褐色 5YR5/3
	ST69	A Ⅱ	円Ⅰ		?	2	1	薄	—	薄	3・?・?	?		?	?	?		27	灰褐色 5YR4/2
	SR15	—	円Ⅰ		—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—		—	—
	SR66	—	円Ⅰ		—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—		—	—
Ⅳ期	ST12	A Ⅰ	円Ⅱ		木	2	1	普	—	薄	3・0・0	?		78	51	56		26	灰褐色 7.5YR4/2
	ST01	A Ⅰ	円Ⅱ		木	3	1	普	—	普	2・2・3	53		76	54	50		28	黒褐色 10YR3/2
	ST22	A Ⅰ	円Ⅱ		?	3	1	厚	—	薄	?	?		?	?	?		27	にぶい黄褐色 10YR5/3
	ST23	A Ⅰ	円Ⅱ		木	3	1	普	—	普	2・0・3	54		73	60	47		29	黄褐色 2.5Y5/3
	ST13	A Ⅰ	円Ⅱ		木	3	2	普	—	厚	2・2・3	54		76	60	50		28	灰褐色 5YR4/2
	ST32	A Ⅰ	円Ⅱ		木	3	2	普	—	普	2・0・3	49		73	55	49		27	暗赤褐色 5YR3/2
	ST60	A Ⅰ	円Ⅱ		?	3	2	普	—	普	2?・?・?	?		?	?	?		27	にぶい褐色 7.5YR6/3
	ST26	A Ⅰ	円Ⅱ		木	3	2	普	—	普	2・3・3	50		80	56	55		23	にぶい黄褐色 10YR5/3
	ST63	A Ⅰ?	円Ⅱ		?	3	1	厚	—	普	2・0・3?	?		?	?	?		24	灰黄褐色 10YR4/2
	ST03	A Ⅰ	円Ⅲ		木	3	1	普	—	普	2・2・3	50		76	55	51		29	灰褐色 7.5YR4/2
	ST31	A Ⅰ	円Ⅲ		?	3	1	普	—	普	2・?・?	?		?	?	?		28	黒褐色 7.5YR3/2
	ST36	A Ⅰ	円Ⅲ		木	3	2	普	—	普	2・2・3	?		75	56	49		27	暗赤褐色 2.5YR3/2
	ST45A	A Ⅰ	—		?	3	1	厚	—	薄	2・?・?	?		?	?	?		?	灰黄褐色 10YR4/2
	ST45B	A Ⅱ	—		?	1?	1	普	—	普	?	?		?	?	?		?	灰褐色 7.5YR4/2
	ST37	A	—		?	?	?	薄	—	普	?・?・3?	?		?	?	?		27	にぶい黄褐色 10YR5/3
	ST09	B	—		木	3	2	普	—	—	6※1・0・0	43		67	48	46		?	灰褐色 5YR4/2
	ST28	C Ⅰ	—		木	2	1	普	—	—	7・0・0	35		51	39	34		20	暗褐色 10YR3/3
	ST06	C Ⅰ	—		木	3	1	普	—	—	4・0・0	34		50	37	32		20	にぶい赤褐色 5YR5/3
	ST10	C Ⅰ	—		木	3	1	普	—	—	4・0・0	37		50	38	31		22	灰褐色 5YR4/2
	ST17	C Ⅰ	—		木	3	1	厚	—	—	5・0・0	34		50	37	33		19	灰黄褐色 10YR4/2
	ST29	C Ⅰ	—		?	3	1	薄	—	—	※1・?・?	?		?	?	?		23	灰褐色 7.5YR5/2
	ST41	C Ⅰ	—		?	?	1	?	—	—	2・1・2	36		54	41	31		22	—
	ST05	C Ⅱ	—		?	?	?	普	—	—	?	?		?	?	?		?	褐灰色 7.5YR4/1
	ST18	C Ⅱ	—		?	?	?	厚	—	—	多数	?		?	?	?		20	オリーブ褐色 2.5Y4/4
	SR34	—	円Ⅱ		—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—		—	—
	SR38	—	円Ⅱ		—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—		—	—
	SR68	—	円Ⅲ		—	—	—	—	—	—	—	—		—	—	—		—	—

法量・口縁・掘方
…P35 参照

蓋
石…大きな石で蓋をして、粘土で目張りするもの
木…木蓋が想定できるもの。石でおさえるものが多い。

目跡
1…目跡がないもの
2…口縁端部まで施釉し、目跡が残るもの
3…口縁端部の釉をふき取り、目跡が残るもの

頸部
1…頸部付け根の釉をふき取らないもの
2…頸部付け根の釉をふき取るもの

刷毛
○…内面に螺旋状の刷毛目がみられるもの

沈線
胴上部の沈線の数・胴中部の沈線の数・胴下部の沈線の数
※●は波状文の数（直前に示す沈線の数には含めない）

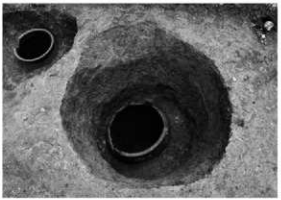
（1）Ⅰ区全景①（北東より）

（2）Ⅰ区全景②（南より）

PL.2

（1）Ⅱ区全景①（北東より）

（2）Ⅱ区全景②（南西より）



(1)ST01

(2)ST03

(3)ST05

(4)ST06

(5)ST09

(6)ST10

(7)ST11蓋

(8)ST11

PL.4

(1)ST12

(2)ST13

(3)ST16蓋

(4)ST16

(5)ST17

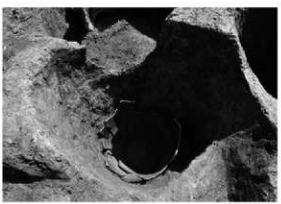
(6)ST18

(7)ST22

(8)ST23

(1)ST26

(2)ST29



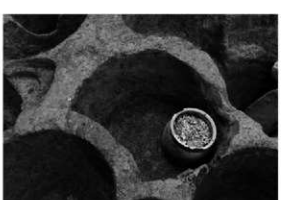
(3)ST31

(4)ST32

(5)ST36

(6)ST37

(7)ST41蓋



(8)ST41

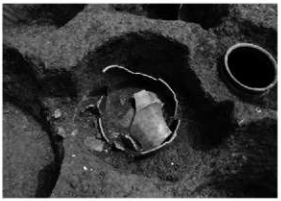
PL.6

(1)ＳＴ４１拡大

(2)ＳＴ４５

(3)ＳＴ６０

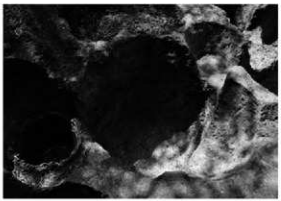
(4)ＳＴ６２



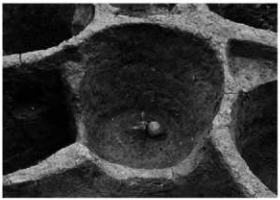
(5)ＳＴ６３

(6)ＳＴ６９

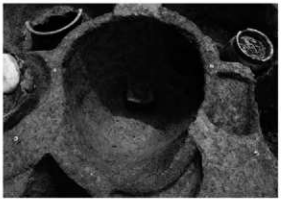
(7)ＳＲ１５



(8)ＳＲ２１



(1)ＳＲ３４

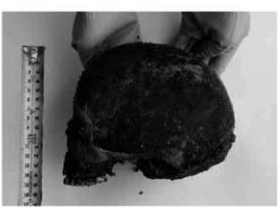


(2)ＳＲ３８

(3)ＳＲ６６

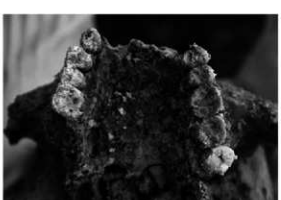
(4)ＳＸ２７

(5)ＳＴ１１頭骨①



(6)ＳＴ１１頭骨②

(7)ＳＴ１１頭骨③



(8)ＳＴ１１頭骨④

(1)ST01

(2)ST03

(3)ST06

(4)ST09

(5)ST10

(6)ST11

(7)ST12

(8)ST13

(1)ST16

(2)ST17

(3)ST18

(4)ST23

(5)ST26

(6)ST28

(7)ST32

(8)ST36

PL.10

（1）ＳＴ３７

（2）ＳＴ４１

（3）ＳＴ６２

（4）ＳＴ６３

（5）墓石５

（6）墓石６

（7）墓石７

（8）墓石２

報 告 書 抄 録

ふりがな	とじいせき
書　　名	都地遺跡６
副 書 名	―第９次調査報告―
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第１３３５集
編 著 者 名	朝岡俊也
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒810－8620　福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	2018年３月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
はらいせき 原　遺　跡	ふくおかけんふくおかしにしく 福岡県福岡市西区 おおあざかなたけ　ばんち 大字金武2028番地1	40137	0420	33°31′58″	130°19′8″	20160314 ～ 20160513	205㎡	留守家庭子ども会施設増築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
都地遺跡	墓地	弥生／近世	弥生-柱穴/近世-甕棺墓27＋早桶墓8＋土坑11＋木棺墓2	弥生-弥生土器/近世-陶磁器＋金属器	

要　　約	都地遺跡は室見川中流西岸の河岸段丘上に位置する。第9次調査区は都地遺跡の南東側の段丘縁部に立地し、早良平野を一望できる。 本調査区では40基を超える墓からなる近世から近代の墓地や、弥生時代の柱穴を検出した。墓地の内容は甕棺墓が27基、早桶墓が8基、早桶墓か甕棺抜き取り坑か判断できない土坑が11基、長方形の掘方をもち木棺墓と考えられる土坑が2基である。表土中からは墓石もいくつか出土し、最も古いもので元文二年（1737年）銘をもち、明治・大正の銘をもつものもあった。甕棺の編年などをもとにすると、今回検出した墓の時期は18世紀中頃～19世紀前半を中心とし、木棺墓に関しては17世紀に上る可能性がある。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1335集

都地遺跡６

―第9次調査報告―

2018年（平成30年）3月26日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印　刷　株式会社月成印刷
福岡市博多区大井2丁目13番27号